



思いを…紡いで…あなたへ…

お昼休みになると全校放送が流れています。「被災地へ贈る2曲目ができました。被災地へのあなたの思いをお寄せ下さい。歌詞にします。」

そして、スピーカーからは、1曲目の「明日へ」の合唱と、2曲目のバイオリン演奏の「For You」が流れてきます。学校中に被災地を思う優しさが拡がっていくひとときです。

2014年被災地応援カレンダー作りしました!

カラーでお見せできないのが残念ですが、季節毎のお花と花言葉がスケッチされていて、11日を忘れないための印があり、各月にメモが出来るスペースがあって、裏表で1年分という省スペースのA4版です。

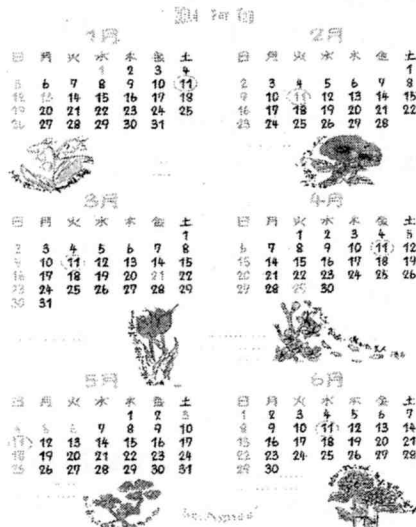
カレンダーの上の部分には被災者への思いを込めて

2014 For You と記され、下段には St. Agnes' と記されています。

光沢紙で丈夫な紙ですから、あなたのお家のどこかのインテリアとして使って頂くと嬉しいです!!

価格は、500円です。

たくさんの方がお買いあげ頂けると被災地へのクリスマスプレゼントが1人でも多くの方に送れます。ご協力お願いします。



被災地は今

福島原発事故で避難している人々の「全員帰還」をめぐるその困難性が発表され、原発事故の深刻さが再認識されている。帰還困難区域の住民2.5万人・居住制限区域住民2.3万人・避難指示解除準備区域住民3.3万人これらの人々の不安は時が経つにつれて高まる一方。福島以外の被災地の仮設暮らしの人々にとっても、復興が進まず、3度目の冬もまた厳しい。

実行委員会活動報告

中学1年生、高校2年生、そして、「卒業まで少しですが頑張ります。」と高校3年生も…新しいメンバーが加わり：十一月は、私学フェスティバルにも参加し、あすK OYフェスタ（十一月二十三・府立植物園）にも参加します。時間があれば来て下さい!

これからも私たちは、学内外に、被災地の今を応援する事の大切さを訴え続けていきます。

私も何かしよう!と思っている人は、実行委員になりませんか!

有り難うございました!

今年も、高校2年生の修学旅行ホームステイのお土産に被災地応援グッズを利用して頂きました。感謝します。



今月は**社会科の金井先生**に、朝礼放送でも紹介された被災地の、もう一面の課題について報告して頂きます。

この夏、研修で東北に行ってきました。南三陸町は仙台から北東に車で2時間くらいの位置にあります。人口が約1万4千人、養殖業が盛んな地域でした。周囲を山に囲まれて、湾に面した小さな平野が広がります。3月11日午後2時46分、宮城県南三陸町の防災対策庁舎2階にある危機管理課。町職員遠藤未希さんは放送室に駆け込み、防災無線のマイクを握りました。防災無線が30分も続いたころ、津波は庁舎に迫りつつありました。「もう駄目だ。避難しよう」。上司の指示で遠藤さんたちは、一斉に席を離れました。津波の後、屋上で生存が確認された10人の中に遠藤さんはいませんでした。この年の9月に披露宴をする予定だったそうです。震災時によって行政機能を喪失した南三陸町の再建は困難をきわめました。防災センターの周辺は、未だに草がぼうぼうと生い茂り、残された鉄骨の撤去が決まったそうです。南三陸町から南側に位置する石巻市は震災当時の人口が16万3216人、震災による死者は3249人で、行方不明者は530人にのぼります。

ところで、宮城県南三陸町144名、石巻市782名。これは今回の震災で被災した外国人の数です。その多くは女性で国籍は中国、フィリピン、韓国などです。農業や漁業中心のこれらの町や村になぜ、外国人がいるのでしょうか。彼女たちは、東北の農村にやってきた移住花嫁さんなのです。東北の農漁村では、以前から若者達が都市に出て行って、過疎化が進んでいました。村に残って結婚して農業を営む女性も減っていました。そこで、農家を存続させるために、町や村単位で、海外からの花嫁さんを募集したのです。彼女達は、震災でどうなったのでしょうか。石巻市が外国人にとったアンケートによると、震災や津波のよる家の全壊または半壊が54%、多くの人が収入ゼロまたは半減と答えています。ジジン、ツナミという日本語は知っていたが、「タカダイ」という日本語を知らない人は半数以上いたそうです。日本に来て、5年から10年たち、何とか会話は出来るけれども、読むことや書くことのできる人はごくわずかです。ある程度の会話は出来ても、漢字混じりの日本語の読み書きは困難をきわめるそうです。ボランティアの方のお話では、お会いした30人の外国人の中で、履歴書を書ける人は一人しかいなかったそうです。

被災した外国人の女性たちは各村や町に点々と住んでいます。地域から孤立し、支援から取り残されたり、仮設に入っても、狭い家の中で生活を共にする夫や日本人の義母との関係がうまくいかないなど様々な悩みを抱えているそうです。そんな中、外国人支援センターの取り組みで、各村や町に小さな日本語教室がつくられています。私が訪れた南三陸町の沼田の仮設住宅では、日本聖公会などの支援でケセンゴの日本語教室が開かれています。ケセンゴとは、気仙沼や南三陸町あたりの方言です。孤立していた外国人被災者達が、週に何回か集まって学んでいます。今まで一人ぼっちと思っていた人たちが、仲間がいることを知り、少しずつ元気になっていくそうです。

震災から2年半以上たちますが、被災地の復興の話も聞きます。しかしこのような外国人被災者のことは、ほとんど知らされていませんでした。私自身も、今回、初めて自分で見えてなかったものが見えてきたように思えました。

外国人の被災者の方たちが、一緒に住んでいる人たちを大好きといえる日がくるでしょうか。異なる民族の人、違う文化をもつ人が共に生きていくようになるためには、私たちの側からの働きかけがもっと必要なのだと思います。